

春風秋霜

7月号

令和3年7月1日
島田市教育委員会より
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 学校便りから

六合東小学校の学校便りに「ほめ方」について書かれていました。以前、教育委員会の提言で述べたことと同様の頑張りや過程を褒めるという内容に、うれしさを感じました。

私が中学1年生だった頃、理科の長谷川先生に言われたことを今でも覚えています。肥料をたくさんやれば植物は大きく成長するという友達の発言に、「肥料をやりすぎると枯れてしまう」と反論すると、先生は「その考えはこれから勉強する浸透圧に関わることだ。良く知っているな」とほめてくれたのです。

附属静岡小学校の研究会で、参観者が「子供たちが意欲的に追究している時に、教師のやるべきことは何か？」と質問すると、講師は、「どんなに意欲的に追究している子供でも、追究していることの系統性や発展性は理解できないので、教師には追究の価値づけをすることが求められる」と答えました。

また、ほめるときは価値づけとして、例えば、黒板をきれいにしていた子供がいた場合、係の仕事として行っているならば『責任感がある』とほめ、係ではない子なら『自主性がある』とほめるべきです。黒板を拭く行為だけほめると、次も黒板をきれいにするかもしれませんが、他の行動への発展は見込めません。価値づけをしっかりとすると、同じような価値の行動に結びつくと言われています。

子供のほめ方には、頑張りの過程をほめることも大切ですし、価値づけるというほめ方もあると思います。結果や行為だけをほめることは、ほどほどにした方がよいと思います。

2 「島田ゆめ・みらいパーク」が1周年

6月6日(日)に「島田ゆめ・みらいパーク」が1周年を迎えました。コロナ禍ということもあり入場者数が心配されましたが、年間8万人という予想を大きく上回り、20万人を越す利用がありました。

本年度からは管理を伊太和里の湯の管理者に委託し、キッチンカーの出店や温泉の1周年割引デーの設定など、これまでにない企画も行われています。これまでに課題になっていた駐車所不足については、未舗装だったイベント広場を整備し、駐車台数の確保も予定しています。

市内学校では遠足の目的地にするなどの利用も進んでいます。今後も多くの市民に楽しんで頂けたらと願っています。

3 小学校運動会を参観して

今年の運動会は、新型コロナウイルス感染症対策と熱中症対策を合わせて行うことになり、どの学校も工夫をしていました。種目の負荷によってはマスクをして行う競技がある一方で、教師の指示の下、全員がマスクを外したり、苦しくなったらマスクを外したりと、競技内容や子供の発達段階を考慮した取り組みが見られました。

運動時には原則マスクをしないという文部科学省の通知もあるものの、保護者の中にはコロナ感染を心配する声も強く、各学校はその中で最適解を模索していると思いました。

このような各学校の努力が、島田市内の学校で校内感染を一件も起こしていないことに繋がっていると思います。各学校の努力に感謝します。今後はますます熱中症が心配されま
す。子供の負担を考えての対応をお願いします。

4 寺子屋の始動について

6月9日（水）に初倉寺子屋がくらはらでスタートしました。今年は23人の3年生が学ぶ
ことになっています。初倉南小では17人の3年生が6月16日（水）から学習をスタートさ
せました。自主的に参加を決めた子供たちの意欲を評価したいと思います。子供たちには、算
数への苦手意識をなくし、家庭学習の習慣化を期待したいと思います。

西田元校長は福祉的な視点での寺子屋事業を進めています。また、これまでもいくつか
の学校（地域）で短期の寺子屋事業が行われてきました。三ツ合町では継続的な寺子屋が
スタートし、川根地区でも中学生による小学生の支援が模索されていました。

形は様々でも、着実に子供への支援が広がっていることをうれしく思っています。どん
な事業を開始するにも課題はあります。しかし、その課題を解決する方法も必ずあると思
います。イギリスのチャーチル元首相は、「悲観主義者はあらゆる機会の中に問題を見出す。
楽観主義者はあらゆる問題の中に機会を見出す」と言っています。リスクだけに目を向け
るのではなく、新しいことに挑戦できたらと思います。

肘かけ椅子

柳川 真佐明 教育委員

「ウッドショック」

最近、メディアに「ウッドショック」というワードがよく取り上げられています。ウッド
ショックは、新型コロナウイルス禍からの経済回復が進む米国、中国で木材需要が高まっ
たことに端を発し、両国に木材が集中したため、需要の7割を輸入材に頼る日本でも、品不
足による建設着工の遅延や価格の高騰を引き起こしています。輸入材の価格上昇につられ
るかのように、国産材価格も値上がりしています。

そこで一般的に懸念されるのは、住宅の価格も高騰するのではということです。これは
木造住宅価格の中で木材費の占める割合がかなり高いと思われるからでしょう。実際
のところその割合は、15%程度でしかありません。確かに住宅価格は木材費に影響されま
すが、何割も上昇する事は無いと思われます。

この状況がいつまで続くのか、木材価格がどのくらいで落ち着くのか難しいところ
です。過去の例から見ると、急騰の後には急落が待っているかもしれません。しかしながら、この
現象により一人でも多くの方が、我が国の林業に目を向ける機会となることに、業界人
としてうれしく思います。

林業が現在抱える課題の一つとして、日本の森林の樹齢構成における若い樹木が少ないこ
とがあります。50年を適齢伐期とした場合、20年未満の森林面積は10%に及びません。特に
ここ10年間、植林の面積は極めて少なく推移してきました。40年後を想像すれば高樹齢の
山ばかりが目立ち、適齢期にある森林が少ないという姿です。このような状況を招いた原
因を考えると、全てではありませんが、長引く木材価格の低迷があると思います。持続可
能な資源である森林が、適正に更新されていくために、ウッドショック後の木材価格がそれ
に見合いうようになっていくことを望んでいます。